



# OVERSEAS

## 海外事情

### Independent State of Papua New Guinea



—パプアニューギニア独立国—

## 地球最後の楽園とは…



三宅 清孝 MIYAKE Kiyotaka

八千代エンジニアリング株式会社／国際事業本部／社会・経済基盤部／主幹

### はじめに

パプアニューギニアは、南太平洋のオーストラリアの北に位置するニューギニア島の東半分及び周辺の島々からなる熱帯の国である。ちなみに、ニューギニア島の西半分はインドネシアとなっている。

パプアニューギニア第二の都市であるレイ市の都市開発プロジェクトのため現地を何度か訪問したの

で、地球最後の楽園と称されるパプアニューギニアの姿を紹介したい。

### 歴史

ニューギニア島中央部には東西に走る山脈がある。パプアニューギニアはその島の東半分を山脈で分けた南側のパプア（旧イギリス領）と北側のニューギニア（旧ドイツ領）が合併してできた国である。パプア

の名称はメラネシア人の縮れ毛を意味するマレー語で、ニューギニアはメラネシア人がアフリカのギニア人に似ていることから名づけられた。その後オーストラリアの委任統治を経て、1975年に独立を果たした。訪問していた2015年は独立40周年となり、盛大な記念式典が開催された。

太平洋戦争では日本軍がニューギニア島の北岸を占領したが、ポートモレスビー攻略を前に飢えとマラリアで多くの死者を出して撤退した。プロジェクト対象地のレイでも、海岸には当時の日本軍の輸送船「妙高丸」が、砂浜に埋没して未だに残っているのが確認できる。

### 自然

パプアニューギニアには、広大な原生林や世界的に貴重な動植物が多く残っている。訪問したのは、首都ポートモレスビーとレイ周辺の都市部であったため、多くの自然に触れる機会は少なかったにも関わらず、出会うことのできた希少な動物や多雨による豊かな緑は、やはり地球最後の楽園と称するに相応しい

ものであった。

### 民族・言語

パプアニューギニアは世界で最も文明から取り残された国と言われており、人口700万人に対して、800以上の文化の異なる部族が存在する。これらの部族は厳しい地形によって

隔絶され、近年まで数km先の隣の部族に気付かなかったということも多いようだ。そのため部族毎の言語が800以上存在する。しかも、日本の方言のように似通った言語は少なく、単語や文法などの相互の関連性が低い。

公用語は英語、ピジン語、ヒリモ

ツ語の3つであり、現地で主に使われているピジン語には英語やドイツ語の他、様々な言語がミックスされている。現地の人々は、我々外国人が喋る英語をほぼ100%理解してくれる。しかし、英語とピジン語をうまく使い分けられない人が多く、ピジン語をさも英語のように話しかけてくる。

### 物流・物価

レイで最初に驚いたのは、市内の各所に大型のスーパーマーケットがあり、中には豊富な商品が並んでいる事である。生鮮食品を除く商品の95%ほどがオーストラリアを始めとする海外からの輸入品であり、生鮮食品も半分ほどは輸入品と思われる。スーパーで手に入らないものはないほど物が豊富であるが、それらの価格は日本の概ね1.5倍と高く、物によっては日本の何倍もの価格であり、買うのに躊躇するものが多い。

物価は食料品だけでなく、何でも高い。事務用品費、携帯通話料、レンタカー代やホテル代などは目が飛



写真2 旧日本軍の輸送船「妙高丸」



写真1 独立40周年記念式典



写真3 代表的な動物キノボリカンガルー



写真4 船での移動中に出会ったイルカ



写真5 レイ中心部の市場



写真6 ビートルナッツを売る露店

び出るほどだ。ホテルは日本のビジネスホテルクラスで1泊3万円、朝食は別料金で3,000円といった具合である。

### 生活スタイル

これほど物価が高い中、月の平均世帯収入が2万円ほどの市民は、どうやって生活しているのだろうかと思議になった。しばらく滞在して分かったことは、やはりパプアニューギニアの生活スタイルの基本は「自給自足」という事である。都市部に住む一部の富裕層を除いて、大半の人々は自給自足であるため、外で買い物をする必要がほとんどない。この事実を確信するに至ったのは、ある日のドライバーとの会話である。

プロジェクトで雇用していた29歳のドライバーには4人の奥さんがいて、一夫多妻はキリスト教のパプアニューギニアであっても法的に認められているとの事である。4人の奥さんのうち3人には子供がおり、それぞれの第一子だけをドライバー自身が引き取って共に生活し、第二子以降は奥さんが育てる。4人の奥さんにはそれぞれ結婚と同時に家を建

て与え、各家を月に一度くらい訪問する程度で、ドライバー自身は3人の子供と両親と生活している。4人の奥さん同士は非常に仲が良く、奥さん同士と一緒に買い物に行ったりもする。

ドライバーの給料でどうやって養っているのかと聞くと、「何もお金は払っていないし、払う必要はない」との事であった。家だけ与えれば後は放っておいても何ら問題ないのである。唯一、病気になった時だけは通院費を負担しているようだ。やはり自給自足は本当なのだと確信した。

郊外にはスーパーマーケットのようなものはなく、野外市場と露店しか存在しない。そこで売られているもののほとんどは、ビートルナッツと呼ばれる嗜好品であり、農作物は僅かばかりだ。これも自給自足の証であろう。

ビートルナッツはヤシ科の植物の実で、他にコショウの葉と石灰の3点セットで売られており、これらと一緒に噛むと口の中で赤く変色し覚醒作用が生じるらしい。石灰と一緒に噛むというのは何とも身体に悪そうだが、この商売だけはどこに行っても繁盛している。

### 土地

パプアニューギニアの土地の97%は「カスタマリーランド」と呼ばれる慣習的土地所有制度の下、部族毎に共同所有しており、土地の売買はほとんど行われていない。首都ポートモレスビーでは、古い一軒家でも1億円を超える価格で売買されている。この国では、土地は何よりも大切なものと考えられており、現代でも隣の部族と土地を巡る争いが起きている。海岸沿いにブルーシートのテントが並ぶ集落を見かけたが、これは争いに負けて元の土地を追い出された人々との事だ。

一世帯当たりの土地が広いのも面白い。どう見ても土地に余裕があるような家屋が疎らな集落でも、「もうこの土地はいっぱいだ」と人々は言う。やはり自給自足をするためには、ある程度広い敷地が必要なのだろう。

パプアニューギニアの人口分布も独特だ。気候が良く天然資源の豊富な高地ハイランド地方に、人口700万人のうちの約40%となる280万人が集中している。都市部ではポートモレスビー首都圏に約30万人、レイ都市圏に約20万人と少ない。レイ周



写真7 湧水に集まる人々

辺だけを見ていると、こんなところに人は住んでいないだろうと思われる山奥にもたくさんの人が住んでいる。これは、自給自足とカスタマリーランドの文化によるものだろう。

### 治安

プロジェクトを開始する上で現地治安が懸念された。金品目当ての強盗が多発しているが、凶悪犯は少ないとの事だ。確かにスーパーマーケットなどは厳重な警備がなされているが、街の様子は長閑で平和に見える。部族同士の争いが現代も続いているこの国では、金品を奪い合うのも彼らの生活スタイルなのである。

近年、レイ市の刑務所では2度の脱走事件が発生しており、最近の事件では100人を超える囚人が脱走し、そのうち数十名が射殺されたと言う。

また、都市部では近代化により色々な部族が混ざり合って生活しているが、地方部ではやはり注意しなければ「よそ者は皆敵だ」という考えが残っていると思われる。

### 人々

パプアニューギニアの人々はとてもフレンドリーで、よく挨拶もしてくれる。我々に対するおもてなしの気持ちも大きい。しかし、仕事をする上では人々の適当さには呆れてしまう。これまで色々な途上で仕事をし、日本人とは違った適当な人々に手を焼いてきたが、この国は別格であった。

何かの依頼をするとその時の返事は抜群に良く、すぐ対応すると言

ってくれる。しかしその後、何度も訪問させられ、その都度期待を持たせる返事をしておいて、最後にはやっぱりできないと言って断ってくるのが日常茶飯事である。それなら初めから曖昧な返事をしてくれればこちらでも期待しないが、大きな期待を持たせられるだけ裏切られたという失望感が大きい。おそらく彼ら自身に悪気は全くなく、「約束」という概念がないだけなのだろう。

### 最後に

東京からポートモレスビーへは週1便の直行便が飛んでおり、所要時間は6時間半と意外に近い。日本からこれほど近いところに地球最後の楽園が残っているのだから、もっと多くの日本人が渡航することを期待したい。

パプアニューギニアの観光の発展には、治安と物価という二つの大きな障壁がある。近年の急速な社会の発展により、これらの状況は改善されていくものと思うが、一方で現代まで残されたこの貴重な楽園は、このまま維持して欲しいと願っている。



写真8 釣舟に乗って遊ぶ子供達